

平成23年度北海道高等学校教育経営研究会夏期シンポジウム基調講演（手持ちメモ）

2011年7月31日

「ポスト高度成長期における高等学校の役割を考える——教育社会学の視点から——」

広田照幸(日本大学)

hirotat@chs.nihon-u.ac.jp

会場：北海商科大学

〔1〕はじめに

皆さんこんにちは、広田でございます。

今、会長からご紹介があったように昔は歴史研究をずっとやっておりまして、陸軍将校の養成の教育ですとか、明治維新後の士族の子弟がどのように学校へ行ったかなどを研究しておりました。また学歴主義や躰の歴史を調べたりしておりました。地味な歴史研究者だったんですね。

1990年代のある時期から現代の問題をやるようになって、現代の教育問題だとか教育改革とかについて考察するようになりました。さらには、グローバリゼーションとか、未来世代への責任とかを論じるようになり、だんだんと未来の教育をどうデザインするかといった話をするようになってきたわけです。過去から未来へと主題がシフトしてきているのですが、ただ研究の視点は一貫しております。それは大きな社会の変化の中で、学校教育は何をしてきたのか、また何をしていくのかということです。ですから明治維新を挟んだ大きな社会の変化の中で学校教育は何を果たしてきたのか、戦争に向けての時代の変化の中で教育は何をしてきたのか、現代であれば、高度成長に向けての変化の中で家庭の教育はどのように変わってきたのか、またグローバリゼーションが進む中で学校教育は何を考えるのかなど、自分では研究のテーマは一貫しているつもりです。

さて本日の講演の要旨は、日本社会のポスト高度経済成長の時代を考えると高校教育は、生徒たちに大人になってもらうことを考えなければいけない時代になっているのではないかと、ということになります。すなわち戦後は高校生を社会から隔離して、ある意味特別な状況に置いて大学受験に打ち込ませるような高校教育を何十年も続けてきたが、今一度高校生がいろんなことに「気がついたり」・「考えたり」・「やってみたり」しながら大人になっていくような教育をしなければならない、ということをお話ししたいと思います。

〔2〕何のための高校教育？

（1）教育の目的・目標について——なぜそれぞれの教科を学ばせるのか？

そもそも何のための高校教育かを考えてみます。まず資料の9ページをご覧ください。そこには教育基本法と学校教育法について、それぞれの教育理念や高等学校の目的・目標が掲載されております。私は初めて学校教育法の51条を読んだとき大変感動しました。た

たとえば条文第一項「・・・、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。」の中の“社会の形成者”の件ですとか、条文第三項の「・・・、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、・・・」の中の“批判力を養い”などの件にです。深く首肯できるんですね。このような法律の条文はタテマエじゃないかといえればそれまでです。「そうはいつでも就職や受験の圧力があるんだからそのための勉強をしなきゃならないんだ」とかね。でも、そういう高校現場のホンネばかりで押し通せばみんなが幸せになる社会になるのでしょうか。そうはならないのがポスト高度成長期の時代ではないでしょうか。たとえば進学と就職のための競争をしても誰もが勝てる社会の状況ではないし、みんなに平等のチャンスがあるわけでもない。現在は誰かが勝てば誰かが負けたり排除されたりする時代ですよ、そうだとすると今までとは違うことを高校教育では考えていかなければならない。

理想に向けて努力するとか、理想に近づこうとする努力なしには、ニヒリズム（無定見・無節操主義）やシニシズム（冷笑主義）の教育になってしまいます。ニヒリズムやシニシズムに陥らないで教育のこれからを考えていこうとするときの一つの出発点が、法律にあるような教育の理念や目的だと思うのです。それをもう一度捉え直してみる必要があると思うのです。

（２）教育目標の二重性について

とりあえず、少し教育学者らしい話をします。

ドイツの教育学者ブレツィンカが『教育科学の基礎概念』（黎明書房）の中で、「教育目標の二重性」について説明しています。それは、教育を受ける者はこうあるべきだという理想としての教育目標《生徒は～であるべし》と教育者が実際に教育するために課題とされる教育目標《教師の～なすべし》についてです。この二つの教育目標は違う、ということをもっと私たちは理解しておく必要があります。後者は、十分に達成されることが可能ですが、前者が達成されるかどうかは不確定であり、しばしば達成され得ないレベルに目標が設定されるのです。

たとえばいじめを取り上げますと、「いじめをなくす」という教育目標を設定し教師は様々にいじめをなくす努力をしていくわけですが、だからといって生徒たちの中でいじめが全くなくなることはないのが実情でしょう。このように《教師の～なすべし》は、目標を立てて実現することはできる（いじめをなくす指導を計画通り十分やった）けれども、《生徒は～であるべし》はできるかどうかわからない。生徒の間でいじめがなくなることが実現するかどうかは定かではない。——これが教育なんです。

「すべての生徒にXを理解させたい」と教師は努力することはできる。「すべての生徒にXを理解させる」という目標に向かって、教師は最善の努力をなすことはできます。しかし、「すべての生徒がXを理解した」という最善の結果が得られるわけではない。《生徒は～であるべし》という目標は、実現不可能な高いレベルに設定されているのが普通だからです。

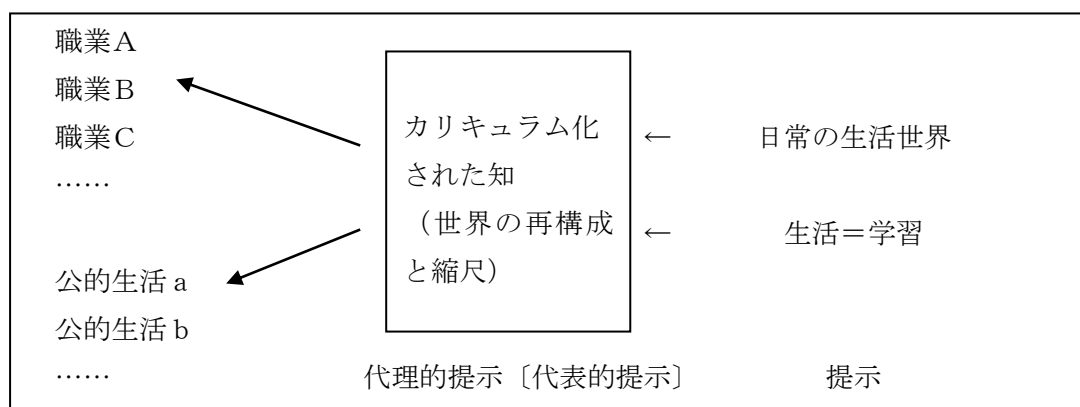
世の中には「学校は「〇〇をやる」と言いながら指導しているのに、子どもたちはそのように育っていないじゃないか」などと学校を責める人がいますが、そういう人たちは、教育目標の二重性がわかっていない。また、教える側の学校内部にも「どうせ実現できない目標だから＝タテマエだから」と、《教師の～なすべし》自体をあきらめる人がいたりします。これも目標の二重性をわかっていない。

学校教育法に掲げられた目標は、確かにタテマエなのかもしれません。しかし、ただのタテマエだと割り切ってしまうと物事は先に進まない。高い理想を見失ったニヒリズムやシニシズムに陥ってしまいます。「その理念に向かって動き出せば何がしかまではできるかもしれない」と考えれば、新しい一歩が踏み出せるのではないかと思うのです。教える側の最善の努力までは、やればできる。ですからもう一度教育基本法や学校教育法に謳ってある高邁な理念や目標を大事にしてみませんか、というのがここで話したいことの基礎の部分になります。

(3) 学校教育の疎遠さと可能性について

もう一つ、興味深い教育学者の議論をご紹介します。

研究紀要の基調講演資料2ページに図がありますね。これはK.モレンハウアーが『忘れられた連関』（みずず書房）という本の中で論じていることを私が少しアレンジして、図に表してみたものです。



学校は中心にある四角です。学校が提供するの、「カリキュラム化された知（世界の再構成と縮尺）」です。「代理的提示」(Repräsentation)〔訳書では「代表的提示」〕と彼は呼んでおります。

学校がない時代は右側の状況ですね。「日常の生活世界」です。そこでは、生活の中で必要な知識や技能が学ばれていました。だから、「生活＝学習」です。これは江戸時代を考えると分かりやすいですね。江戸時代の子どもたちは親と一緒に野良仕事をやりますが、野良仕事をやっているといつの間にか作物の育て方を理解していく。日常の生活がそのまま学習であるような世界、これをモレンハウアーは「提示」(Präsentation)と呼んでいます。この時代には学校はいらなかった。

ところが、近代になってくると「代理的提示」の学びが中心となってきます。近代の学校の始まりです。子どもたちは、日常生活にないもの、日常世界の外側にあるものを、学校で学ぶこととなります。すなわち近代の学校とは私たちが住むこの大きな世界をパッケージ化して子どもたちに学習させる場なのです。たとえば、地理や世界史、物理、あるいは外国語を学ぶということは、いわば再構成され縮尺された世界を学ぶということになるのです。子どもたちは学校という場で世界を経験していき、その経験を基に図の左側にある職業Aや職業Bといった職業社会や市民生活の世界へと出ていくこととなります。また職業ばかりでなく公的生活についての知識やノウハウを学校で学んでいくことにもなります。たとえば高度な言葉や歴史や科学を学ぶことで市民社会の一員としての要件を獲得していくわけです。これらは日常の生活では学べないことばかりですね。教室の中で世界が縮尺されカリキュラム化されてそれを学ぶことで子どもたちは世界を認識していく。このようにパッケージ化された知識を習得する、これが近代の学校の役割なんです。生まれ育った身近な生活世界とは違う広い世界へ、学校を通して踏み出していくことができるようになるのだということです。

しかしながら、ここで問題が生じます。それは「代理的提示」でのパッケージ化された知は、子どもたちにとって疎遠な内容であるということです。日常生活にないものを学校で学ぶのだから、疎遠な内容であることは、ある意味必然です。だが、ここに大きな困難がある。勉強する気がしない、勉強する意義がみえなくなりがちだ、ということです。

この疎遠なものを学習させるためにいろいろな戦略があります。これについては『ヒューマニティーズ 教育学』（岩波書店）の中で書きました。ヨーロッパ近代初期の時代には、勉強させる最初の戦略は体罰でありました。15世紀あたりはそれしかありませんでした。子どもたちにとって疎遠なラテン語を習得させるために、鞭を使って勉強させていたわけです。16世紀半ばになりますとイエズス会などが競争というテクニックを用いはじめました。グループをいくつか作って競わせるんです。そうすると子どもたちはがんばるんですね。この手法は今でも使ってますね。

現代の学校では、体罰や競争などとは異なるやり方で、教育内容の疎遠さによる困難を何とかしようとしています。子どもたちに自発的に学ばせるための工夫や仕掛けがある、ということです。

たとえば、「(勉強の意義は) 今にわかる」とか「受験のためだ」と言って、余計なことを考えさせないでがんばらせる方法も使われていますね。学んでおけばいつかは役に立つから今は何も考えるな、あるいは、しばらく先に受験というゴールがあるのだからそれに向けて集中せよ、とって勉強させようとするわけです。これをあとで問題にします。

もっと別の方法もあります。それは子どもたちの日常生活（図の右側）と関連付けて学ばせる手法です。たとえば経験学習なんかがそうですね。たとえば、「自分の町を探検してみよう」—警察署がありました、郵便局がありました、市役所がありました—などの発見から、社会の仕組みを理解させていく学習方法ですね。子どもたちの実体験に知識を関

連付けて習得させていくわけです。子どもにとっての疎遠さを何とか克服しようとする試みですね。

さらに別の方法では、図の左側にある将来の自分の職業を意識させて勉強させるというのも一般的ですね。希望する職業に就くためにどのような資格や学歴が必要なのかを意識させてそれに向けて努力させる、キャリア教育の考え方がこれの例です。あるいは現実の広い世界を理解することの知的な楽しさや学びがいなどを味わわせること——総合学習の時間が目指していたものがこれに当てはまります——もできます。グローバルな環境問題についての学習なんかはこれですね。普段学習している知識の延長上にグローバルな環境問題を位置づけて考えさせる。このことが理解できると、今学んでいることは断片的だけれども、それらを蓄積して組み合わせると未来の様々な課題解決に役立つんだ、ということが分かる。それが個々の科目を学ぶことの動機付けになる。

今述べたように、学校というのは、もともと、日常にはない疎遠なものを子どもたちに学習させる装置としてあったし、今でもそうです。そこで、子どもたちに自発的な学習をあさるためのいろいろな戦略があみ出されてきました。

〔3〕「今にわかる」「受験のため」を越える

（1）「今にわかる」「受験のため」でやってきた日本の高校

この観点からみると、日本の高校は、長らく、「今に分かる」とか「受験のため」といった説明で生徒たちに勉強をさせるという、先延ばし戦術がもっぱらつかわれてきました。私には、現代ではそれが大きな問題をはらんでしまっているように思われてなりません。この問題を次に考えてみることにしましょう。

戦後、ある時期から、日本の高校では、「余計なことを考えるな。勉強だけやっていたらいい」というふうな指導の文化が支配的になってきたように思います。「何のための勉強か」という疑問に対しては、「(勉強の意義は)今にわかる」とか「受験のためだ」と説明して、視野を狭くする形で勉強に専念させる、というやり方です。いわば、荷馬車を引く、目かくしをされた馬のような状態に、生徒たちを置いてきたと言ってもいいですね。

ここには、次の3つのことが関わっています。

第一に、高校生が現実の社会の問題を考えたり、それに関わったりすることを、日本では抑え込んできました。「高校生を現実社会に触れさせない」ベクトルが働いていた、ということです。

1960年には、高校の生徒会が学校外の問題を扱うことを不適切とみなす文部事務次官通達が出されました。さらに、学園紛争が激化した1969年には、高校生が個人として政治的な活動に関わることを望ましくないとみなす文部省初等中等局長通知が出されました。そこでは、放課後や休日に学校外で生徒が個人で関わる政治的活動も、「学校が教育上の観点から望ましくないとして生徒を指導することは当然である」とされたのです（鈴木・平原編『資料 教育基本法 50年史』）。

冷戦と学園紛争の時代の影響を受けた動きで、当時としてはやむをえない部分があったのかもしれませんが。しかし、結果的には、高校生までは現実の政治に触れさせないような高校の姿を一般化させてしまいました。その後の高校生は、せいぜい、若者文化の消費者として社会との接点を持つけれど、現実の政治や社会問題などとの接点を持たないまま10代の後半を過ごすような生き方が広がったわけです。現代の若者の政治離れとか私生活主義が問題にされますが、これは大人が意図的に作り出した結果だと思います。私はこれを「高校生のコドモ化」と呼んでいます（「コドモを市民に育てるには」『アステイオン』第72号、2010年）。

第二に、長い間受験競争が厳しかったことも、「今に分かる」とか「受験のため」といった説明で生徒たちに勉強をさせるというやり方を支えてきました。90年代の初めまでは受験競争が激しかったので、高校はそれに対応しなければならないという社会的要請があったわけです。それぞれの高校の評判は、もっぱら受験の実績によって左右されていました。「興味深い教育実践をやっている」とか「面白い子どもたちが育っている」などというのではなく、「国立大学に何人進学させた」などといった基準が重視されてきたのですね（それは今も基本的にはそのままでしょう）。

ちょっと脱線しますが、本当は、高校で学んだものは、大学で特定の専門を学ぶ上で役に立つものが多いんです。たとえば、高校の数学は、理系だけでなく文系でも大学のそれぞれの分野のアプローチの基礎となっている部分が大きくなっています（広田・川西編『こんなに役立つ数学入門—高校数学で解く社会問題—』ちくま新書）。また、特定の専門に限らず、大学で「教養教育」として与えられるものをしっかりと受けとめるには、高校の時のさまざまな科目が基礎として必要です。

私のいる大学での教育学の学習を例に取りましょう。学生たちにちゃんと教育学を学ばせようとする、高校のいろんな科目がきちんと修得されている必要があります。どんなことを深めようとしても文章をきちんと読めて書けること、つまり現代国語の力は当然必要だし、教育思想を理解させるためには、日本史や世界史の知識がないと困ります。教育史を深めたい学生には古文や漢文の学習が役立つ。教育行財政の仕組みを理解するためには「政治・経済」で出てきた知識が活用されるし、比較教育学を学ぶときには「地理」が役に立つ。英語圏に留学したり、英語文献を読んで卒業論文を書く学生もいないわけではありません。教育心理学を本当にちゃんと理解するためには数学が必要です。教員採用試験のための試験対策で学ぶのなら薄っぺらい暗記でやれる部分もありますが、本当にきちんと教育学を多面的に理解するためには、高校までの教育がしっかりと身につけておくことが必要なのです。

私のいる大学のレベルでは、数学や外国語を使いこなして卒業論文を書いたりする学生は残念ながらごくわずかです。でも、何かを知りたい、考えたいと深めていこうとした時に、多かれ少なかれ、高校までに学習した内容が学生たちの「知の足場」になっていることは確かです。だから、高校までの学習は、「大学受験のため」ではなく、「大学に入学し

た後の学習のために学んでいくべきだ」と説明してほしいですね。

いや、大学に進学しない人たちにとっても、高校までのカリキュラムの多くは、職業生活や市民生活の上で役に立つものです。単に仕事に役立つ、という点だけで考えるのではなく、社会の出来事を理解したり、歴史や文化を享受して人生の愉しみにしたりするような意味も含めれば、高校までの学習が、その後の人生の豊かさや広がり基礎になります。

だから「受験のために学ぶ」というのは、勉強の目的を矮小化しすぎているように、私は思います。

ちょっと脱線しました。

第三のポイントは、「若い人たちは余計なことを考えなくてよい」という経済の仕組みが作られていたということです。

経済システムのほうからいうと、基本的に好景気が長く続いたこと、その中で、「会社が人を育てる」というふうな慣行や文化が作られていた、ということです。高度成長そしてバブル景気と1990年代初めまでは好景気が続いており、普通高校では「何のため」も考えずに勉強さえしていれば大学に進学した後の就職は何とかなりましたし、職業高校では、まじめにやっていたら、学校推薦でどこかに就職させてもらえました。学校でそれなりにやっていたら、会社が訓練して育ててくれる日本の雇用があるから大丈夫という安心感があったのです。会社に入ってその会社の一員としていろいろなことを学んでいけば、定年まで会社が人生を保証してくれるような生き方が見込めたわけです。

企業は、新入社員に特段の技能やスキルを求めず、一般的な基礎的学力があればそれで十分で、会社に入ってから社内研修やOJTなどで教育をする、というふうな感じでした。だから、そこでは学力はその中身が問われることもなく、学歴が一般的な知的能力・選抜の指標としての価値であって、たとえば大学で何を学んだのかよりもどのランクの大学へ行ったのかということに意味が与えられていました。

第4のポイントは、政治の状況も関わっている、ということです。経済成長を背景にした利益分配型の政治は、「社会のあり方をまじめに考え、社会を変えていく」市民を必要としておりませんでした。政治家と業界団体と官僚とで物事を決める。利害の調整とか、新しい問題提起とかは、業界団体と族議員が動いてやってくれるので、一般の人々はあまり政治にかかわらなくてもよい、という構図があったわけです。何年かごとにおこなわれる選挙で「〇〇先生」へ投票しておけば、「〇〇先生」は政治力を使って公共事業を地域にもたらし、そして雇用などの面で地域を潤したわけです。経済成長が続いている間は、一人一人が政治や社会に関心を持たなくても、いつの間にか地域が潤い、会社も順調にやれたし、豊かさが広がる中で、暮らしのさまざまな問題も自然に改善されていっているような経験をすることができました。

したがって、自分の職業や自分が生きていく社会について、若いうちにあれこれ考えなくても何とかなった時代だった。受験まで何も考えずにそこそこまじめに勉強しておけば、その後の自分の人生はうまく回るだろうと考えてもよいような状況があったわけです。

(2) 日本社会の大変動——高校教育の漂流

1) 経済・政治の変化

ところが日本社会の大変動が起きます。

1つは経済のグローバル化と低成長時代の到来です。1985年のプラザ合意以来ドル安が世界経済に定着します。そうすると円高が進行し国内の企業は輸出が振るわなくなる。そうすると企業はグローバル展開しなければならない。国内でのフルセット型産業構造から、「産業の空洞化」が始まっていきます。多くの企業が海外から部品を調達したり生産拠点を海外に置くようになっていきます。それが本格的に始まったのは、1990年代ですね。これに伴って企業は正社員体制を捨て、一部の正社員と残りの従業員は非正規雇用者ということになったわけです。高卒労働市場は急速に縮小し、2000年頃からは大卒者の就職率も悪化してくるようになりました。大卒だからといって必ずしも正社員にはなれない時代がやってきます。

こうなるとわれわれは重大な選択を迫られてきました。それは従来から続けてきた日本の企業システムをさらに維持するのか、それとも大胆な構造改革をやって経済システムや企業経営の効率化を目指すのか、あるいは、低成長でも困窮層を作らないより公平な社会を目指す再分配か、という選択です。「めざすべき社会」をめぐってみんながちゃんと考えて、議論し、決定していかねばならない時代がやってきたわけです。

次に政治の転換も重要です。戦後長らく続いた利益分配型政治の終焉です。利権をあさる族議員や、省益にこだわる官僚が叩かれるようになりました。同時に、1990年代～地方分権化が進行していきます。2000年には地方分権一括法の成立で、地方の責任が一気に高まりました。併せて地球規模の問題であるグローバルな課題が噴出してきています。京都議定書（1995年）のように、国境を越えて問題の解決を議論しないとイケないような問題がたくさん出てきました。

それは、「国が何とかしてくれる」時代の終焉でもあります。地方分権によって、地域でみんなが考え、議論し、判断することが必要になってきました。と同時に、グローバルな課題（経済や環境やセキュリティなど）についても、賢明な世論が醸成されることが必要な時代になりました。このため教育では、一人一人が社会のことを考え、自ら社会に関与して意思決定させていく、能動的な市民を作り出していくことが必要となってきたのです。

2) 教育の環境変化

さてその一方で、教育もこの間変化してきました。まず大学に入りやすくなってきた。受験競争はむしろ受験生集めのための大学の生き残りを指すようになってきた。少子化も進み大学の間口も広がったわけですね。1980年代末から大学定員が増加していきます。急増する18歳人口への対応が80年代末の課題で、臨時定員増がなされました。92年以降の

18歳人口減少期になったとき、文部省はそれまでの大学の総定員管理政策を放棄しました。その結果、臨時定員はそのまま定員化されるとともに、大学や学部の新增設が広がっていききました。子どもが少なくなっていく中で、新しい大学や学部・学科がどんどん作られていくようになったわけです。「受験競争」は軟化していきます。

90年代の末からは、選抜の多様化が進むことになりました。AO入試が導入され、特に入学者確保に青息吐息の大学が飛びつきました。もともとはペーパーテストでは測れないものを重視しようという理念だったものが、志願者（＝合格者）確保の手段として使ってしまったのです。もはや、高校でまじめに勉強しなくたって、えり好みさえしなければどこかの大学には進めるような時代になってしまいました。

3) 戦略の対立

経済や政治の変化によって、子どもたちの未来は不透明な時代になりました。何も考えずにまじめに勉強さえしていたら、どこかで安定した仕事にありつけて、会社や国が明るい未来を保証してくれる、という時代は終わりました。一人一人がきちんとものを考え、判断し、自分の人生や地域社会のこと、もっと広い社会のことを、責任持って動かしていかなければならない時代になってきていると思います。

もう一方で、受験競争が軟化し、「受験のため」という動機づけが、はなはだウソくさいゲームのようにみえる時代にもなってきました。

さてこのような時代を迎え高校教育は何のためにやればよいのかという問題が出てきます。教育論の中では、学校の役割をめぐって戦略の対立があります。

1つは競争を再活性化するというやり方です。たとえば学校間競争ですね。子どもたちをけしかけるのではなく、学校同士を競わせて、それで学力を向上させようという目論見です。テストの得点だけをゴールにしたようないびつな競争があちこちで煽られています。また高大接続テストもそうですね、ともかくもテストがあるからそれに向けて勉強しろ、と言えるわけです。

2番目は、普通科高校を作りすぎたと判断して、専門高校を増やそうという考え方です。「普通科の内容は、どう役に立つのかわかりにくい。だから子どもたちはろくに勉強しない。もっと有用性が実感できるような内容を学ばせれば、積極的に学ぶはずだ」という考え方ですね。職業的有用性へのシフトともいえます。

3番目は、市民形成の役割を強調する立場です。わたしはこの立場に賛成しています。たとえば受験のための世界史ではなくて、市民的教養としての世界史ですね。そういうことを考えていきましょうという立場です。

資料の9ページをごらんください。高等学校学習指導要領第2節地理歴史第1款の目標を確認しましょう。「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」とあります。これはまさしく市民形成ですね。

今度は10ページを見てください。世界史Aの目標です。「近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」とあります。ほお、こんな科目なのか、と新鮮に感じませんか。わたし自身、世界史は暗記科目だとずっと考えておりましたが、学習指導要領にはそうは書いておりませんね。歴史的な視点を育成すべしということですね。ぜひともこのような学習を展開してほしいと思います。

さらに理科に目を転じます。理科の目標はこうです。「自然に対する関心や研究心を高め、観察、実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な自然観を育成する」となっています。OECDの成人調査では日本人の科学的リテラシーは世界の平均よりずっと低いんですね。しかし、この目標を読むかぎりには日本の教育はしっかりやっていますね。共に市民形成の視点がベースになっていると思います。

4番目は教育には「期待しない」という立場の議論もあります。教育はしょせん、勝ち組とか負け組を出現させてしまう仕掛けにすぎない。みんなの人生の見通しが不明確になってきているからこそ、手厚い福祉国家をつかって所得の再分配をすればいい。教育をいじってなんとかしようとするのは間違いだという考え方です。

さて1番目の競争を活性化しようとする考え方は、目の前の子どもを勝ち組にしようとする教育です。しかし競争で勝ち残ったからといって、未来が約束されるわけではない。また勝ち組を生む教育は、必然的に他の子どもたちから負け組を生み出すしかない。さらに個人のエンパワー戦略は、失敗者の失敗を自己責任化する。がんばってダメだったのは君の責任だということになりかねない。また自分のための学習は、私益中心の世界から抜け出せない。これは重要なポイントです。

この点は、2番目の戦略も同じです。たぶん普通科目よりは職業科目を教えるほうが子どもたちの食付きはいいかもしれません。将来の職業に直結しているように感じられるからです。ただそれは、就職市場での競争に勝ち抜ける、という像だともいえます。「他者」は競争相手にすぎない。その意味で、「進学のための勉強」と大差はなく、自分を基点として世界を狭く理解している点で同じことですね。

職業教育へのシフトには、さらにもっと大きないくつかの難点があります。手強い議論なので、ちょっとしつこく話します。第一に、職業教育が増加したとしても、だからといってその分野の雇用の数が増えるわけではない、ということです。たくさんの普通科高校を専門高校に転換していったとしたら、おそらくすぐに特定の分野の卒業生は飽和してしまいます。そして、学んだけれどもそれを生かせる仕事に就けない、という卒業生がいっぱい出てしまうでしょう。現実に高校卒業生に開かれている求人は、この20年ですぐにぶん様変わりし、多くは単純技能労働や不安定な仕事が大半です。特定の専門に向けた高校教育を増加させることは、すぐに幻滅を生むことになるでしょう。

ついでにいうと、世の中の多くの仕事は、職業教育による技能よりも一般的な知的訓練こそが有用です。たいていの仕事は、入職した後に具体的なスキルやノウハウが習得されます。

第二に、高校教育で職業教育をやるのは、実はあまり機動的ではない、と思うのです。ある時、労働問題の専門家と論争したことがあって、その時私はこういう話をしました。何か新しいスキルの指導方法を学習指導要領に盛り込んで学校教育で実現するには10年くらいかかる。学習指導要領を作り、それに沿った教科書を作り、それを使った授業のプランを開発し、3年かけて第1期生を送り出す。その時には新しいスキルはもはや陳腐化しているかもしれない。労働市場の状況がすでに変動しているかもしれない。ですからそのような時代に即応したスキルの習得は、厚生労働省等が実施する短期の職業訓練などを充実させることで達成すればよい、といった話をしました。

第三に、専門高校を増やしていく仕組みは、15歳で自分の未来の職業を決めるような社会を作り出してしまう、ということです。普通科高校が多数派であるような日本社会は、大多数の子どもに将来を未決定にして高校教育を受けることができる仕組みだといえます。18歳までに自分の将来の方向を決めればよいというほうが、保護者も子どもも十分な検討ができるはずだと思うわけですね。

文科省の学校基本調査によれば、実際には、高卒で就職する者の割合は十数パーセントです。多くは大学や短大、専門学校に進む社会になってきています。次の学習の段階で必要なもの、有用なものを高校で学んでいるのだ、というふうに考えれば、普通科目はかなり有用だと私は思います。ただし、前に述べたように「受験のため」ではありません。

かつてのように受験競争で勝ち抜いた者もそうでない者も、それなりに安定した将来が約束されるような社会、という像は、低成長とグローバル化の中で、大きく揺らいでいます。だからといって、目の前の生徒を「勝ち組」にしようとする教育に没頭していたら、どこかで「負け組」の生徒たちがどうしても生まれてしまうことになります。

だからもっと発想を変える必要があるのではないのでしょうか。教育を通して「みんなでより良い社会をつくろう」という動きを作り出す、そういった戦略が必要ではないかと思うのです。個人的には、教育を通して社会を考え議論し判断する市民をつくるのが重要だと考えています。

昨年（2010年）7月に内閣府で「子ども・若者ビジョン」が策定されました。わたしも素案づくりに関わりました。その理念の中に、「自己を確立し社会の能動的形者となるための支援」というフレーズがあります。これは画期的なことです。それ以前の青少年は非行対策や貧困対策など「対策」の対象でしたから。ただ、90年代に子どもの権利条約が批准されて相当考え方が変わってきた。その成果をさらに一歩進めたのがこのビジョンだと思います。その中で子どもの社会参加の方策として、シティズンシップ教育、インターネットを活用したコミュニケーション、各省庁で策定する政策への参加などを計画していますし、一部実施をしているところです。中央の行政では、能動的に社会を作り出す主体

になってもらう、という若者政策が進み始めているわけですね。

社会の出来事に目を向け、それをきちんと理解し、積極的に関わるスキルやセンスを持った若者になっていってもらうこと——高校教育の段階でも、そのことを意識して学習させることが重要であると考えています。むしろ、「教育目標の二重性」の問題があります。そういう目標を掲げて教育してみても、全員が能動的な市民になってくれるわけではありません。でも、今の社会にきちんと目を向け、社会をつくりかえようとする5%の市民が、もしも30%になれば、確実に社会は変わるはずだ、と思います。EU諸国の高校段階の教育は、そうした市民形成を重要な目標に据えています。日本もようやくそういうことを考えねばならないことに気づき始めているのだと思います。

〔4〕高邁な理念に向けて何ができるのか

（1）地方でできるようになることは増えているし、おそらくさらに増える

ここまでの話をちょっとおさらいしてみましょう。学習指導要領に記載されている目標にあるような市民形成という高邁な理念が棚上げになってこれまでの高校教育は進んできました。しかしポスト高度経済成長の社会がここまで進んでくると、もう一度この高邁な理念の実現の可能性を考えていかなければならない。「受験のため」に勉強をさせるというのではなく、市民として十分な力を身につけるために勉強をするのだよ、というふうに、生徒に説明できるような高校教育のあり方を考えていただきたい。

それでは高邁な理念に向けて何ができるのか、それを考えていきたいと思います。まず、地方レベルでできるようになることは増えているし、おそらくさらに増えるということを目指したいと思います。とくに高校は1980年代から各自治体で固有の改革が行なわれてきています。小中段階では無理だが、高校段階では各地で自律的な改革が行なわれてきています。ユニークなことを考えて、提案して、実現することが可能です。ですから教育委員会関係者も校長先生や教員も思考停止していたのではダメですね。いろいろなアイデアを出し、議論し、提案し、実現していったほしいと思います。

（2）やっていくべきこと

1) 法令を読みこなす

その際、とくに必要なのは法令を読みこなすことだと思います。それは「法令を逸脱しないために」ではなく、「どこまで自由にやれるのか」を確認したり、法令を柔軟に解釈して使いこなしたりするため、あるいは、新しい法令や条例・規則の制定を求めるために、しっかりと研究していただきたい。「規則やルールを守る」だけでは不十分で、「規則やルールをうまく使いこなす」、さらには「規則やルールを変える／作る」といったレベルで新しい教育の可能性をさがしていただきたい。

郷原信郎さんは「法令遵守」のかけ声により思考停止の状態が進んでいる弊害を厳しく批判しています。彼によれば「法令の具体的規定をそのまま『遵守』するのではなく、法

令の趣旨・目的と基本的な解釈を自分の頭で理解することによって社会的要請を把握すること」であり、「社会的要請という観点から考えれば、法令の適用の妥当性を判断することもできる」はずなのです（郷原『思考停止社会』講談社現代新書）。

教育行政や学校経営は様々な規則やルールに基づいて行なわれているけれども、その規則やルールは、うまく使いこなしたり、作りかえたりする余地が残されているはずですね。その研究を進めていただいて工夫されたらよいと思います。

2) 学校に自由を保障すること

第二に、その際には、各学校で創意工夫できるような自由を保障することが必要です。上からの改革がダメなのは、現場の人たちにとって押しつけになってしまうことがしばしばだからです。中学までとちがって、高校は、各学校でそれぞれまったく状況が異なります。個々の学校や教員が創意工夫してくれないと、分権化した仕組みは機能しません。学校で自由になるお金や人をもっと増やしたり、カリキュラムや方法の自由度を保証して、現場の先生方がやりがいをもって創意工夫していけるような仕掛けを作り出してほしいと思います。「工夫してやってみたら面白かった。だからまた頑張ってみようか」と先生方に思わせるような雰囲気を作り出してほしいと思います。

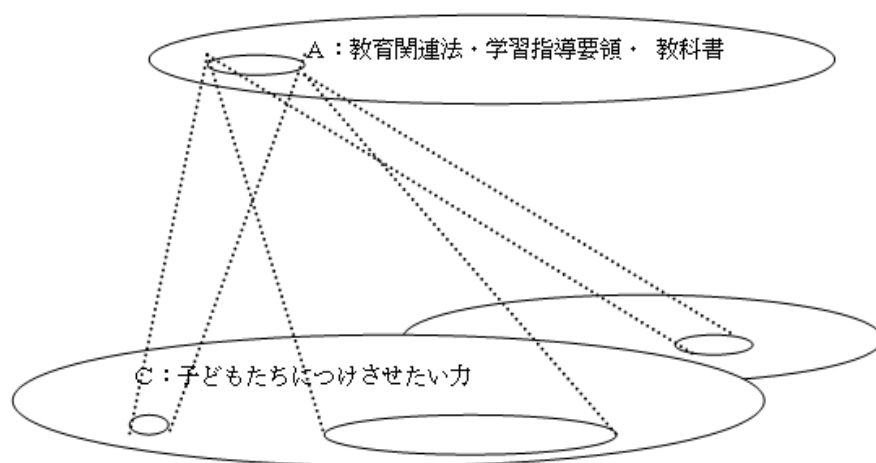
3) 多様な教育の可能性について、もっと勉強すること

そのためには、多様な教育の可能性について教員個々による研究も必要ですね。これはとても重要なポイントです。これまでの教員は学校の中で様々なスキルを獲得してきました。それは先輩教員からの指導などが中心です。大きな変化がない時代にはそれでもよかったけれども、社会が大きく変化しており、学校も大きく変えていかないと、という時代には、このような先例から学ぶだけの経験主義ではダメですね。学校の外から何かを探してくる姿勢が一つ必要だと思います。学校関係者で共有されている以外のものから何かを得ること、たとえば大学の「〇〇教育学」から見つけ出してくるといったことを挙げておきます。それは、フィンランドの教育であったりシンガポールの教育からでもいいし、デューイを読みなおしてみるとか、柳田国男の著作からヒントを得るとか、何でもいいんです。目の前の学校にはないもの・ことからヒントを得ることが大事ですね。

繰り返しますが、みなさんには多様な教育の可能性についてもっと勉強してほしいと思います。「まだ目の前にないもの」を探すというクリエイティブな仕事を通して、新しい学校を作るというエキサイティングな作業ができるわけです。その時のアイデアもこれらの研究から生み出されるのではないかと思います。

教科指導の部分にかぎっていうと、教育関連の法規や学習指導要領、教科書からそこから何を切り出してどう教えていくのかは教員の力量だと思います。受験のためと称して効率的に教えることもできるし、市民形成などといった新しい認識を身につけさせるために教えることもできるわけです。これまで全員が受験で勝者にはなれないというお話をしま

した。また全員が就職で勝者になれるわけでもないというお話もしました。そういう時代だからこそみんなが社会のことを考えられる基礎的なスキルを高校で身につけることが大事だと考えています。図1を参照していただきたいと思います（図1：何をどう教えるかの自由さ）。どういう視点を設定して、どう掘り下げていくかは、個々の教員や個々の学校によって、創意工夫の余地が限りなくありそうです。



〔5〕いくつかの必要なこと

最後になります。

では改めていったい何を高校で学ばせようとするのか。わたしはこれまで個人的に考えていることをお話してきましたが、本日参会のみなさんが教育の専門家としてどこまで新しいことを考え、探していただくのかといったことは、みなさん次第だと考えています。社会の現状とこれから、子どもの現状とこれからについて、みなさんの洞察力や構想力が問われるのだと思います。

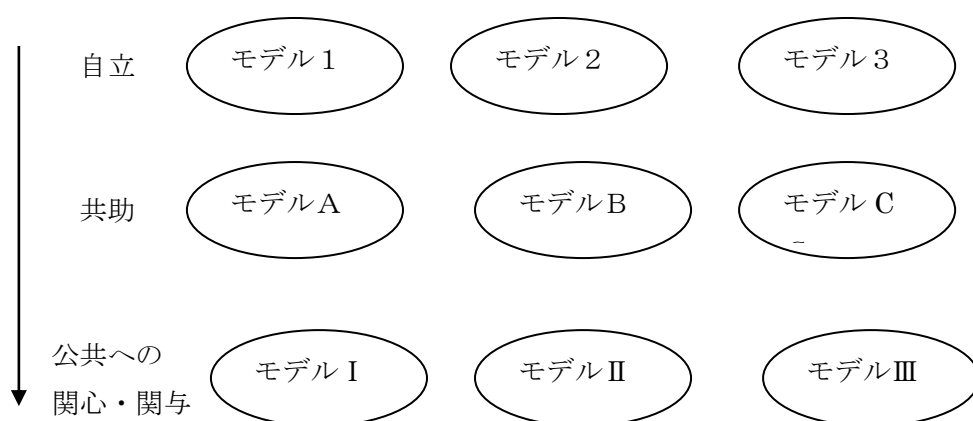
いくつかの必要なことをお話して終わりたいと思います

一つは、これは繰り返しになりますが、職業人としての準備の教育を考えてみます。たとえば進路多様校などでは、世界のことを考えるのは無理ですから自分の将来をきちんと考えなさいという教え方をしています。それはそれでいいのですが、高校生全員が全員、自分の将来の職業のことしか頭にないというのでは困る。

比較的余裕のある子どもたちに対しては、是非自分のこと以外の広い世界について考える機会をつくってほしい気がします。自分の日常世界の外側にある世界の問題を考えたりそれに触れたりする機会をつくっていただきたい。それが市民形成としての教育につながりますし、「世の中の役に立つ仕事をしたい」といったことを考える機会にもなるだろうと思います。

その市民形成についての教育について考えていきます。別に王道はありません。基礎学力は重要だと思います。文字の読み書きや論理的な思考力はとても重要ですが、そのうえで自分が学ぶ内容はどの世界とどうつながっているのかを考えさせるような授業を工夫してほしいと思います。最初にみた資料の図（代理的提示）を再び確認してください。1つはカリキュラム化された知を日常の生活世界（図の右側）とつないで考えてみる。高校で学んでいる事柄が自分の日常とどうつながっているのかを理解できれば、学習内容の意義や有用性を理解することができる。もう1つは将来の職業や公的生活（図の左側）とつなげてみる。それによって今学んでいることが将来の何につながっているのかを理解させることも重要だと思います。加えて教員自身が現代の世界・社会についての見識を深めていくことも大事です。

図2を見てください。（図2：教育目標の多層・多元性）



教育の目標は自立のレベル、共助のレベル、公共への関心・関与のレベルに分かれており、これまでのお話した進学のための教育や就職のための教育は、自立のレベルの教育です。学校での集団生活による学びや、部活や友人関係を通じた学びといったことは、共助のレベルの教育・学習です。これは日本の学校制度では割合しっかりやっけてきているところですね。ただこれまで少なかったのは一番下の公共への関心・関与のレベルです。自分の身のまわりの向こう側にあるものに目を向けさせる教育の側面が弱かった。ですからそこに目を開かせるような教科指導や教科外活動を実施していただければおもしろいかなと思います。

すなわち自立や共助だけでなく、公共への関心や関与を育む高校教育ですね。モデルI～IIIのように、そこにはいろんなやり方や考え方がありえます。どういうモデルであっても、とりあえずはいい。広い世界に目を向け、自分の生き方を考える。それは、社会性という点での成熟だと思います。対人関係をそつなくできるのが社会性ではなく、社会の一員としてのしっかりとした考え方やかわり方ができるようになる、ということこそが社会性だと思います。高校生が卒業までにそういう意味での社会性を身につけた、一人前の大人になっていくような高校教育を進めてほしいと考えています。

それではエピローグとしてわたしの大学での話をします。わたしは担当する「教育社会学」の最初の講義で学生たちにこんな話をします。「きみたちはひょっとして試験で良い成績を狙うためにこの授業を受講しているのか？ それだったら意味がない。十数回の講義の中で教育を社会的に見ていく中で自分なりに新しいものの見方のヒントが隠れているはずだから、それを見つけ出せ。試験はいつときだけど、身についた新しい見方は一生使えるはずだ。評価のために勉強するのは倒錯した状況であり、この授業の評価なんかきみたちの一生にとってほとんど意味はない。そうではなくて、私がきみたちにしゃべる中身から、良い物を探し出せ」と。まあそういう言葉に反応して、話の中身から新しい見方を獲得してくれる学生ばかりではありませんが、これと同じことを高校教育にも言いたいと思います。つまり進学や就職のための手段としての高校教育ではなく、高校で学ぶコトやモノが自分の生きていくことにとって意味がある高校教育、みんなで社会をつくっていくことにとって意味がある高校教育——そんな学びができるような高校教育であってほしい。手段としての教育ではなくてそれ自体が有用性のある教育であってほしいと願っています。

以上でわたしの話を終わります。